

国内研修成果報告書

今回訪れた本州と四国の間にある小豆島。この島はたくさんの山ときれいな海に囲まれており、しょうゆやオリーブが有名です。少し歩けばすぐにたくさんのオリーブの木を見つけることができました。

【研修先】

- ・土庄町立大部児童館
- ・土庄町社会福祉協議会
- ・土庄町役場住民環境課人権推進室
- ・島のスクールソーシャルワーカー主催の子ども食堂

【研修日程】

- 8月15日 移動日
- 8月16日 大部児童館で子供たちと交流。午後に社会福祉協議会にて今現在島で行っている取り組みについてお話を伺った。
- 8月17日 児童館にて子どもたちと交流
- 8月18日 地域の方をお招きして子ども食堂を開催、その手伝いを行った。
- 8月19日 帰宅

今回島の子どもたちと交流したなかで感じたことは、都会の子と少し特徴が異なっているような気がしました。都会の子は、知らない人との距離の取り方に慣れているような接し方をしてくれます。しかし、島の子どもたちは他人（全く知らない人）というものになれず、仲良くなることに時間がかかってしまうけれど、仲良くなってしまうと、一気に距離が近くなるような気がしました。これはきっと、島での生活でコミュニティが都会より狭まる分、他人（見たことある人）とよくかかわってきたからではないかと考えます。特に児童館では大人（知っている人）と子どものコミュニティの濃さを感じ取ることができました。私は子供のころ、「遊ぼう」という対象はいつも一緒にいる仲のいい子でした。大体はそうではないでしょうか。しかしこの児童館では、70、80歳くらいのおじいちゃんにも「遊ぼう」は言うし、そのおじいちゃんも決して拒みはせず、そのたくさんの知識を遊びとともに教えていました。島で暮らすということは、人と関わることな

のだと、はまっこの私は感じました。

それらのことから、今回の研修で私は、島の人同士の距離の近さを感じました。しかしそれは長所でもあり、短所でもあるとも思いました。例えば島内では昔ながらの考えがよく根付いていました。“家のことは家で解決をする”。そんな、私からしてしまえば昔ながらの、意志の固いお父さんがたくさんいるような感覚です。あの家族のことをよく知っているからこそ言えない。都会では気が付かないようなことも気が付いてしまうし、住民の方曰く、島のコミュニティが近いがために、広がり方はネットよりも速いのです。介護や配食サービスの車が家の前に止まっていれば、そのことはすぐに島に知れ渡るし、本人も知られずに家の中で解決したいがために、ばれないよう、車を少し遠くに止めてもらっている状況でした。学校の制服が買えなければ、買えないということを周りに言えずに、制服屋さんにお金を待ってもらっている現状も複数あるということです。制服なんか、それこそ近所の子に譲ってもらえばいいのに。島で暮らすということは人と関わるとのことだと書きましたが、島の人たちの距離が近すぎるために、踏み込みきれず、守っていきたいものが少しずつれてしまうような、そんな感覚を体感しました。

もう一つ感じたことは、若者に関しての支援の重大さがあまり浸透していない、それに対しての知識が少ないということです。

社会福祉協議会で今現在行っている活動をたくさんお伺いすることができました。しかしそれらはほとんどが高齢者に対しての活動でした。高齢化が進んでどんどん若者がいなくなっている。島をもっと盛り上げていきたい。そんな言葉はたくさん聞きましたが、あまり活動しているようには見受けられませんでした。さらに、障がい者数の人口比が全国平均を上回っているという現状もあります。高齢化は進み、高齢者への活動は広まっていくのに対して、若者の支援はこれから始める。そんな雰囲気でした。

小豆島は昔ながらの考え方が根付いている。その要因は外から入ってくる空気が少ないということも一つの原因ではないかと考えます。小豆島はとてもいいところです。山ときれいな海に囲まれ、観光地もあります。移住する人が増えているといわれている現代ですが、しかし、そう多くはありません。私たちも実際、小豆島に移住してよとたくさんの方に声をかけていただきました。とても暖かく、優しい方ばかりでしたが、やはり若者が少ないのだと島民の皆さんも感じておられるのだとわかりました。外からの空気が入らないことの原因の一つに、ボランティア活動が少ないということが挙げられると私は考えます。島内には大学もなく、高校もたった一つだけです。進学を期に島を出ていく人もたくさんいるということです。若者は出ていくけれど、残った人たちはやはり、コミュニティの範囲内で暮らしているのです。この中にいち早く風を入れるのだとしたら、ボランティアを募ることが一番早くできるのではないのでしょうか。島のことを手伝ってもらいながら、島の良さをたくさん知ってもらおう。私は今回数日しか小豆島にいることはできませんでしたが、ほんの少し募集

をかけるだけで、風の流れは格段に代わると感じました。今回特に気になったのは、障がいを持つ子、ではなく、その子の弟です。出会ったのは子ども食堂でした。その子たちのお母さんはとても明るく、しっかり前を向くような性格で、気さくに声をかけていただきました。子どもがハンディを持って生まれたとしても、愛情をととてもそそられているということが一日しか見ていない私でもわかりましたし、未来をしっかり考えているということも感じ取ることができました。その弟、Aくんもお母さんとキャッチボールをして遊んでもらっていましたが、お母さんがほかのことにかかりっきりになってしまうと、イヤホンをしてゲームをし始めてしまいました。私は小さな女の子の面倒を見ていたので、その時はあまり声をかけられませんでした。というよりむしろ、かけてこないでの雰囲気を出していたので、ためらってしまったということのほうが正解だと思います。お母さんがたくさん人と触れ合っている分、僕はいいやと外との関係と距離を置いているように感じました。私はAくんとキャッチボールを試みました。するとAくんはたくさん私に話してくれるようになり、とても楽しそうに笑ってくれました。障がいや病気を持つ子の兄弟のことを“きょうだい児”とも言いますが、Aくんの笑顔を見たときに、何かしらの不安を抱えてしまうことはあたりまえだなと感じてしまいました。しかし、そこに風をおくるのは外から来た私達です。あなたのお兄ちゃんに障害があったとしても、あなたがひきこもる必要はないのだよと、伝わったかは微妙ですが、私なんかで笑顔になってくれるのだから、もっとたくさんの人にも触れ合ってほしい、そう思いました。

島の皆さんは都会の私たちの意見をたくさん求めてこられました。島はよそ者を欲しています。知識を欲しています。今回はそれをたくさん感じとることができました。この拙い分を読んでくださった方は、ぜひ観光だけでなく、島の人、内面にもかかわって、コミュニティを広げていていただきたい。